慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Central Labour College, 1909年-1929年(下) : イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合
Sub Title	Central Labour College, 1909-1929 (II)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.3 (1989. 10) ,p.505(93)- 529(117)
JaLC DOI	10.14991/001.19891001-0093
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19891001-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」82巻3号（1989年10月）

Central Labour College, 1909年—1929年（下）

——イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合——

松　村　高　夫

目　　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ラスキン・コレッジ（R.C.）の学生ストライキ
　1　R.C. の教育方針と「ブレブス・リーグ」の結成
　2　D.ハードの辞任と学生ストライキ
Ⅲ　セントラル・レイバー・コレッジ（C.L.C.）の設立
　1　C.L.C. の開校
　2　労働組合の視点からの C.L.C.（以上，82巻1号）
Ⅳ　ロンドン移転後のセントラル・レイバー・コレッジ（C.L.C.）（以下，本号）
　1　C.L.C. のロンドン移転（1911年）
　2　C.L.C. における学生の反乱（1912年）
　3　C.L.C. 女性同盟の結成
Ⅴ　全国労働者コレッジ評議会（N.C.L.C.）とレイバー・コレッジ
Ⅵ　レイバー・コレッジの衰退
　1　コレッジ長クレイクと書記フットの横領事件
　2　コレッジの閉鎖
付　C.L.C. のカリキュラムと派遣学生試験問題

Ⅳ　ロンドン移転後のセントラル・レイバー・コレッジ（C.L.C.）

1.　C.L.C. のロンドン移転（1911年）

1911年11月14日，C.L.C. はオックスフォードからロンドンへ移った。オックスフォードのブラドモア通りの C.L.C. 所在地の地主は，セント・ジョーンズ・コレッジであったが，C.L.C. に非協力的であり，1911年3月，C.L.C. は地主の立ち退き要請により一時オックスフォードのパーク・タウン5番地に移っていた。[(1)] 数カ月ののち，そこも退去せざるをえなくなり，ロンドンのアールス・コート地区に移ったのである。C.L.C. の第3回年次総会（1912年8月）で，書記クレイクはこの移転について，「これらの困難は，疑いもなくオックスフォード文化に特徴的なあの不寛容の精神，反動以外の何ものをも好まない精神によって生み出された」[(2)] と報告している。書記は，シムズが1910年9月病気で辞めたあと，クレイクが引き継いでいた。

注（1）C.L.C., *Report of Second Annual General Meeting*, August 7, 1911, (MSS. 127/LC/4/1/3), p. 3.
（2）C.L.C., *Report of Third Annual General Meeting*, August 5, 1912, (MSS. 127/LC/3/1/1), p. 2.

ロンドン移転後も，C.L.C.の財政は楽観的見通しをもてなかった。コレッジ長 D.ハードの同年次総会報告にも，「コレッジの財政上の闘いはなお厳しく，労働組合がこの事態を真剣に考慮しないならば，コレッジの将来は極めて疑わしい」[3]とある。事実，C.L.C.がロンドンに移転した1911年10月25日から12年6月30日までの間の総収入 £2,996のうち，主な財源である労働組合からの奨学金授業料は £541と18.1%にすぎず，銀行からの借入金も2,159に72.1%を依存していた。ロンドンでは61年間の賃借契約を結ぶことができたが，賃借料 £1,302は全支出の43.5%を占め，他の主要な支出項目は，食料調達 £294，設備・図書費 £233，給与 £159であった。[4]

ロンドン移転に伴い，C.L.C.の運営母体は暫定委員会から新たに設置された理事会 Board になった。この時以降，C.L.C.を支持する諸団体の代表から構成されるこの理事会が，全てコレッジの運営とカリキュラムをコントロールすることになったのである。理事会は7名で構成され，A.S.R.S.からはウィリアムズ J.E. Williams とエドワーズ Ernest Edwards の2名が，また，S.W.M.F.からはアブレット Noah Ablett 他5名が，理事となった。受託者も A.S.R.S., S.W.M.F.のウエスタン・ヴァリーズとアンスラサイト地区の3者とされた。[5]新規則も承認され，ここにC.L.C.は，労働組合が資金援助をしカリキュラムや運営をコントロールする名実共に「独立労働者階級教育」'*independent* working class education' のコレッジとなったのである。

この「独立」とは，公的資金の援助を受けず，労働組合がC.L.C.の財政を賄うということを意味する。であるから，C.L.C.は絶えず財政不足に悩まされることになる。1912年8月の第3回年次総会での労働組合への寄金のアピールに応えて，A.S.R.S.執行委員会は£200の C.L.C.への貸与を決定した。これは1913年1月号の『プレブス・マガジン』のトップ記事となり，「これでコレッジのスタッフは再度ひと息つげると書いた」[6]が，翌月号では取り消された。£200貸与に「我々は喜んだ。あー！ 提案された貸与を（A.S.R.S.）執行委員会は承認したが，受託者は不承認だった。A.S.R.S.の規約に違反していたからである。……C.L.C.は何か他の方法で £200を見つけなければ，コレッジは閉鎖しなくてはならない」[7]と書いたのである。

奨学金授業料が少なかったから，学生数はいぜんとして少なかった。1911年8月から1年間の学生数は22名，そのうち3名は A.S.R.S.が，6名は S.W.M.F.が奨学金をだして送った学生であり，残りは私費学生5名，奨学金による学生8名であった。その他，ハッキング A.J. Hacking が中心になって創立した通信部の学生が，計171名いた。コースは，文法（70名），経済学（41名），論理学（34名），産業史（17名），イギリス文学（7名），進化論（2名）と6つあり，ハッキングの報告によれば，「学生数は少ないが，かれらの知的性格は良好」であった。[8]しかし，1912年秋に寄宿

注（3） *Ibid.*, p. 7.
（4） 'Treasurer's Report and Balance Sheet', in *ibid.*, pp. 8-9.
（5） C.L.C., *Report of Third Annual General Meeting, op. cit.*, p. 3.
（6） *Plebs Magazine*, vol. IV, no. 12, January, 1913, p. 265.
（7） *Ibid.*, vol. V, no. 1, February, 1913, p. 1.
（8） 'Correspondence Department Report', in C.L.C., *Report of Third Annual General Meeting, op. cit.*, p. 11.

制学生が反乱を起こした。

2. C.L.C. における学生の反乱（1912年）

C.L.C. が R.C.（Ruskin College）における1909年3月—4月の学生ストライキから誕生した（1909年9月）ことは前稿（上）で記したところだが，1912年秋，その C.L.C. で学生の反乱が生じた。R.C. でジェヴォンズの経済学は教える必要はない，マルクス経済学のみ教えるべきであると主張し反乱を起した学生が，新たに設立した C.L.C. で，今度はマルクス経済学の講義に対して魅力的でないと反乱を起したのは，何とも皮肉なことであった。批判の対象となったマルクス経済学の担当者は G. シムズ。かれこそ，R.C. のストライキでは指導的役割を果し，C.L.C. 創設の中心人物となった一人である。この C.L.C. の学生ストライキは，C.L.C. のいわば「輝かしい」労働者教育史には汚点とみなされたためか，W.W. クレイクの前掲書 *The Central Labour College* にも記されていない。しかし，『タイムズ』や『プレブス・マガジン』が報じているし，C.L.C. の理事会議事録や教員会議録も残されているので，そのストライキの概要を把えることは可能である。

『タイムズ』*The Times* は，1912年11月18日，「反乱する労働者学生たち」という見出しで，つぎのように報じた。「オックスフォードのラスキン・コレッジから脱退した結果創設されたロンドンのセントラル・レイバー・コレッジで，学生たちが再び反乱の状態にある。かれらは，コレッジがコレッジ支持者たちに最良の利益があるようには運営されていないと主張して，労働組合の指導者たちに支援を求めるアピールを出した。すでに出された回状には，1911年に学寮に20名の学生がいたが，いまや9名まで減少し，かれらを看るために他に9名のものがいると書かれている。現在の基盤の上にコレッジを継続させるより閉鎖した方がよいと，学生たちは示唆している。[(9)]」この『タイムズ』の記事は，T.U.C. 議会委員会の報告書にも転載されているが，T.U.C. は当時 W.E.A.（Workers' Educational Association）を支持し，C.L.C. を敵視していたことを考慮すれば，この反 C.L.C. 的記事がコメントなしに転載されたことが一定の意味を帯びてくる。[(10)]

学生の反乱の発生と経過を，いま少し詳しくみてみよう。1912年11月6日，C.L.C. の学生全員9名は，C.L.C. の運営理事会に数項目の要請書を提出した。この理事会には，理事として議長エドワーズ Edwards，J.E. ウィリアムズ J.E. Williams，N. アブレット Noah Ablett が出席し，教員も3名の学生も出席した。要請の第1点は，寮規制に関するもので，夜11時以降の外出は特別のばあい（会合や劇場にいく）以外は認められず，散歩も違反という現行規則に対し，帰寮時間の延長を求めるものであった。第2点は，学生が使う暖房用石炭を無料支給にして欲しいという要請であった。第3点は，C.L.C. のスタッフが過剰であることと経済学の講義が魅力のないものであることに対する批判であった。第4点は，料理人ブラウンから出された給与増額の要請，第5点は，寮長の権限についてであった。[(11)] これらの要請のなかで特に重要なのは，第3点のスタッフの過剰と

注（9） *The Times*, November 18, 1912.
（10） T.U.C. は W.E.A. を支持し，1915年までは C.L.C. を承認しなかった。前稿（上），p. 54 参照。

経済学講義の魅力の欠如である。

スタッフ過剰については，11月6日に提出された要望書に，つぎのごとく指摘されている。「(C.L.C.の）財政的展望は極めて暗い。労働者階級の教育の本拠が救われるためには，ドラスティックな方法が採られねばならない。労働組合運動はコレッジが抱えている負債を容易に一掃することができるし，コレッジを堅固な財政基盤にのせることもできる。いま提起されている問題は，コレッジがより節約して運営できないだろうかという点である。我々は，寄宿制学生として，はっきり「イエス」という。」[12] 学生側は，昨年度（1911年—12年）は，教員がハード，クレイク，ハッキングの3名，学生が18名だったのに対し，今年度（1912年—13年）は学生が9名に減り，しかも2年間のコースを終えてなお留まっているものが2名いるのは，コレッジの「負担」になっているとして，つぎのように主張した。2名の残留者について，「このコレッジの目的は，労働者階級の利益の宣伝者として人びとを訓練することであり，それ故，かれらは各々の地区に戻り，獲得した知識を拡めることができねばならない。」[13] このように，卒業後も料理人の助手や書記の助手として2名が出身組合に帰らずに留まっていたのが批判されたのである。学生側の要望書は，つづけてこういっている。「労働者階級の教育の原則は正しいし，全面的に支持するに値する。しかし，かようなバカバカしく不必要なスタッフがいたのでは，セントラル・レイバー・コレッジを存続させることはできない。当学院が危機の段階に到達していることは，貴殿にも全く明白であるにちがいない。労働者たちは自らの少ない賃金のなかから，労働組合への寄金を維持するために厳しい闘いをしている。それ故，我々が労働者としてこのコレッジが職務に沿って経営されているか否かをみるのは，当然のことであろう」[14] と。

経済学の講義については，学生側は，「カリキュラムの最も重要性のある科目は経済学である。この科目の現在の講師 G. シムズ氏は，教えるのに全く不適任 incompetent であると我々全員は考える」[15] として，つぎのような決議をした。「……不幸にして，かれの講義のやり方やスタイルは，どの学生にとっても分りにくいものである。我々の側が忍耐強く努力しても，かれの意味するところを理解することができない，と我々は残念ながらいわざるをえない。」[16] そして，シムズに代ってクレイクか他の講師に経済学を講義させるよう求めた。もしこの要求が容れられなかったならば，「はるかに大きな利益が得られると我々が確信する」自主クラスを編成する。そして現在のままでは C.L.C. は閉鎖した方が存続させるより良い，と主張し，改革を求めて学生側全員9名の署名入

注 (11) *Board Meeting, November 1912*, 速記録（15頁のタイプ刷）(MSS. 127/LC/3/1/3), pp. 4-14.

(12) *An Appeal to Trade Unionists* (November 14, 1912)（タイプ刷）(MSS. 127/LC/3/1/5) 同文のものが，*Plebs Magazine*, vol. IV, no. 11, December 1912, pp. 247-8. に掲載されている。1912年11月6日の C.L.C. 理事会宛の要請書もアピールには含まれている。署名者は，9名の学生会員で，J.B. Allen, W.W. Booth, G. Daggar, T. Dean, A. Hatfield, R. Holder, H. Thomas, N. Thomas, C.W. Webber.

(13) *An Appeal to Trade Unionists, op. cit.*, p. 2.

(14) *Ibid.*, pp. 2-3.

(15) *Ibid.*, p. 4.

(16) *Ibid.*, p. 4.

りで，11月14日，労働組合宛にアピールを出したのである。[17]

多少遡及して事態の維持をみてみよう。G.シムズは病気療養ののち，1912年9月17日からC.L.C.に戻り，経済学を講義する一方書記のしごとを再開していた。再開後，間もなくシムズの経済学講義に対する学生の不満が噴きだした。10月22日の教員会議録には，学生側代表は，「1)経済学の講義（複数）は長すぎる，2)長く座っていることは不可能である，3)説明が明解でない，4)方法，スタイルが極めて退屈である，というのが学生の一致した見解であると述べた[18]」と書かれている。この教員会議には，ハード，ハッキング，クレイク，シムズの全教員4名が出席しており，シムズは「長い講義は通して1回だけであり，それは時計をもっていなかったことによる[19]」と釈明している。この会議は学生と個々に会見することを決定したが，学生はその決定がC.L.C.当局による切り崩しを招くことを恐れて強く反発している。[20]

3日後の10月25日には，シムズは学生からの批判について，学生代表に問いただしている。シムズによれば，かれの経済学講義に反対する学生の意見は，第1に，「マルクス以前の経済思想学派の知識は不必要である」，第2に，「たとえその知識が必要であるとしても，その講義の課程のなかでは教えるのが早すぎるので有効ではない」，第3に，「リカード地代論のようなマルクス理論とは反対の他の諸理論は，マルクスの課程をまず開始することなしには理解不可能である」，第4は，「昨年，学生は弁証法の知識なしにコレッジを卒業した」の諸点[21]であったという。因みに，当時の弁証法は，進化論の枠組の内で把えられており，学生代表も，「当コレッジの主要科目は進化論の立場からアプローチされている。すなわち，弁証法は，進化論的観念に基礎づけられた推論以外の何ものでもない[22]」と主張している。

前記11月6日のC.L.C.理事会の前日に開かれた教員会議は，過剰スタッフをめぐって，2対2に意見が割れているのは，興味深い事実である。「ハッキング氏とハート氏は，学生の提起したスタッフ過剰に賛成したが，シムズ氏とクレイク氏はその点に反対し，教員のしごとをコレッジ内部のしごとの関連だけで判断するのは公平ではないと主張した[23]」と教員会議録にはある。その後，前者の声はかき消されていくことになる。

かくして，翌日11月6日のC.L.C.理事会への学生からの要望書提出となったのであるが，理事

注 (17) *Ibid.*

(18) *Meeting of Staff Committee of Labour College,* October 22, 1912, in *MS. Vol. of Signed Minutes,* April 1912—May 1915.（手稿）(MSS. 127/LC/1/3/1)

(19) *Ibid.*

(20) *Meeting of Staff Committee, op. cit.,* October 29, 1912.

(21) *Minutes of Board Meeting of Lobour College,*（タイプ刷）(MSS. 127/LC/3/1/3), November 6, 1912.

(22) *Ibid.,* p. 7. 都築忠七氏は，「この時期のC.L.C.—プレブズの運動の基調をなしたのは，このような進化論に接木されたマルクス主義であり，そうしたものとしてイギリスの産業組合主義に土着のイデオロギーを提供したといえよう」と述べている（前掲論文「アングロ・マルクス主義の再検討」，p. 10）。

(23) *Meeting of Staff Committee, op. cit.,* November 5, 1912.

会に出席した3名の学生のうちの1人ウェバー Webber は，「シムズ氏の講義にこれ以上出席するよりは，ただちにコレッジを去るだろう。というのは，その講義は神経系統を完全にかき乱すからである[24]」と語った。また，他の学生ハットフィールド Hatfield は，不満の原因は，2年次の学生向けの『資本論』2巻と3巻の勉強を目的とするクラスがないことであると述べている[25]。

しかし，学生側の要求は，基本的には拒否された。コレッジ側の決定は専制的であった。「当コレッジは理事会のコントロール下にある。我々は学生たちの心からの協力を歓迎する一方で，かような相互協力と理事会独自に与えられた権限との間には境界線があるということを，我々は学生たちに指摘しておきたい。……この要求書で扱われている事項は，全く学生たちの領域外である。これは経済学の講師についての決議についても同様に妥当する[26]。」教員人事と講義内容は理事会の専決事項であるとしたのである。C.L.C. 当局と学生の対立は深まり，事態は悪化していった。11月14日には，前述の労働組合への回状が学生側からだされることになる。

C.L.C. 理事会は再度11月30日に開かれるが，ここでも学生側の要求は拒否された。それだけではない。理事会は3項目，すなわち，第1に，コレッジ内外の職務について労働団体や新聞に周知させるための宣言をだすこと，第2に，事務員と書記助手として各々2名雇用したのは正当であること（「通常の市場価格ではかような助手を選ぶのは全く不可能な」安い賃金で雇用（書記助手は無給）したのはよろこぶべきこととしている），さらに第3に，経済学の講義についての学生の批判は受け容れないこと，を決定する[27]。さらに運営理事会は「かれ（シムズ）に対する批判とかれがコレッジの規律を維持するために果した役割との間の関連を全く無視することはできないという感触をもっている[28]」とするに至った。学寮の規律維持に対する学生の反発が，シムズ担当の経済学の講義に対する批判となったという見解がこの時はじめて表明されたのである。両者の「関連を全く無視することはできないという感触」は，翌年1913年8月開催の C.L.C. 第4回年次総会での書記報告では，後述するように「断定」になる。以上3項目の決議のあと，運営理事会が教員の負担の実態を述べ，教員は，1)週平均3コマの講義をもち，2)少なくとも月1回各学生の論文を添削し，3)通信部の約200名の論文，演習を添削し，4)地方講義クラス，郵送による講義クラス等を担当し，5)コレッジの行政に関わり，6)外国の労働者組織に対し助言することを挙げている。そして，コレッジのスタッフの平均週労働時間は約14時間，1909年7月から1912年6月までの3年間の総給与額は £260 以下であると述べている[29]。もちろんこうした報告の意図するところは，学生の労働団体宛の回状に対し批判することにあり，回状がコレッジの財政基金が過剰なスタッフに支払われ浪費されていると書いているのは，「迷惑かつ馬鹿気たこと」であることを示すことにあったが，紛争のなかで教員の教

注 (24) *Minutes of Board Meeting, op. cit.*, November 6, 1912.
(25) *Ibid.*
(26) *Ibid.*
(27) *C. L. C., Board of Management's Statement. The Student Circular,*（タイプ刷）(MSS. 127/LC/3/1/4), pp. 2-3. これは1912年12月3日付でG. シムズより発せられた C.L.C. 理事会決定である。
(28) *Ibid.*, p. 3.
(29) *Ibid.*, pp. 3-4.

育負担の実態が明示されたのは，予期せぬことではあった。ともあれ，11月30日の運営理事会の声明は，最後に「この紛争の結果は，コレッジがすでに実行してきたすばらしい活動をより高く評価することに導くだろうことを確信して，我々はこの事項を労働諸団体の判断に任せる[30]」と記した。

紛争の結末は，圧倒的に学生が不利となった。翌年1913年1月31日の教員会議で，シムズが『資本論』の2巻と3巻の講義を週2回ずつ特別講義として開始することを決めた[31]以外は，学生側にはみるべき成果はなく，C.L.C. 当局に抑えこまれてしまったのである。かくして，1913年8月に開催された C.L.C. の第4回年次総会で，書記シムズは，つぎのような報告をする。「学生の回状にかんして，不満は，1)当コレッジが過剰スタッフであること，2)経済学講師が満足でないこと，であった。3つの異なる調査の結果，理事会は2点の告発は真実でないとの見解をとった。理事会はさらに，これらの告発は当学寮の必要な規律に反対するこれらの学生たちによってなされた，という見解をもつに至った。規律の遂行は全くその経済学講師が負うことになった[32]。」こうしてシムズは，経済学講師としての自らに投げられた批判を，書記として学寮の規律確保の責任者シムズがそのことのために学生から経済学講義を批判されたという筋書きに転化した。労働者教育を実施する C.L.C. でさえ，学生の反乱に対しては非民主的な方策をとったのである。

3. C.L.C. 女性同盟の結成

C.L.C. 女性同盟 Women's League of the C.L.C. の活動は，注目すべきものであった。当初，「女性労働者コレッジ」Women's Labour College 設立を目標とした構想は，アダムス夫人 Bridges Adams によって提唱された。1912年5月12日の『デイリー・ヘラルド』*Daily Herald* に掲載されたかの女の論稿は，最近の T.U.C. 大会において，大多数は女性から成る20万3,900名の繊維労働者の代表は83名，その中で女性は3名しかいないことを指摘した上で，労働組合指導者に女性が少ない理由は，「女性自身が確信を失っている」からであるとし，女性労働者コレッジ設立の必要性を説いている。その計画は，まず15名ないし20名を収容するコレッジを男性コレッジの近隣に設立し，可能ならば2年間コース（1年も可）を設け，カリキュラムも男性と同一にすること，そして，男性コレッジの講義もききにいけることとし，授業料も男性と同一額の年間 £52（寄宿舎代と授業料）とすることを提示した。財政援助は労働組合に，とくに女性労働組合に求め，学生をコレッジに送るための奨学金を要請することとした。これは，当時 R.C. に3—6名の女性を学生として送っている労働組合に，女性労働者コレッジにも同様な措置を求めるものであった。可能性のある組合としては，A.S.R.S.，炭鉱夫組合（M.F.G.B.），ガス労働者ならびに一般労働者組合 Gas Workers' and General Labourers' Union を掲げている[33]。

注 (30) *Ibid.*, p. 5.

(31) *Meeting of Staff Committee, op. cit.*, January 31, 1913.

(32) 'Central Labour College, Annual Meeting', in *Plebs Magazine*, vol. V, no. 8, September 1913, p. 176.

(33) *Daily Herald*, May 12, 1912.

アダムス夫人が C.L.C. 理事会に招かれ,「労働女性コレッジ」'Working Women's College'（前出の名称とは若干異なっている）について報告したのは，その半年後の1912年11月6日である。かの女の構想は，先に新聞に発表したものより具体的になっており,「この運動の友人が，匿名を厳格に希望しているのだが，コレッジの長期借家権を購入しそれを相応に改修するのに充分な資金をみつけることを引き受けてくれたので，クリスマス後には開校が充分可能である」[34]と述べた。そして，女性労働者コレッジは独立採算で運営されるが，男性 C.L.C. との間には連携と協力が保たれねばならないし，C.L.C. との将来的な統合の問題も含めて検討するため，アダムス側と C.L.C. 理事会それぞれ3名ずつから成る6名の委員会を設置すべきだと提案した。理事会はこれを受けて委員会の設置を決定し，C.L.C. 側からはハード，クレイク，シムズの3名が委員となった。[35]

同年12月18日には，C.L.C. 教員会議は,「C.L.C. の基金を増やし，宣伝活動を助けるという特別の目的のために，女性委員会 Women's Committee の結成が望ましいと思われる」[36]とし，ホウビン Horrabin，ホープ Hope，チェイター Chaytor，モンテフィオーレ Montefiore，チェシャイア Chashire，グリフィス Griffith の5名の女性を委員に任命し，委員会は月1回教員会議に報告することとした。[37] かくして，C.L.C. 女性連盟 Women's League が誕生し，ただちに C.L.C. 理事会の承認をうけた。間もなく，R. ウエスト Rebecca West や W. ブラチフォード Winifred Blachford 等が女性連盟に加わった。しばらくは確固とした組織なしに活動したが，翌年1913年5月21日，公式会議を招集すると,「20—30名の情熱的な女性が集まった。」ホラビン夫人がひきつづき書記に選出され，会長にはモンテフィオーレが，名誉財務にチェイターが選出された。女性連盟の活動目標2つが掲げられ明文化された。すなわち，1)男性と女性の奨学金基金を集めることにより，C.L.C. の教育活動の前進を助けること，2)C.L.C. の「ソーシャル」の側面を発展させることであった。[38] モンテフィオーレの『デイリー・ヘラルド』への投書の中の文言を使えば,「女性連盟存在の目的は，C.L.C. を財政的かつ社会的（ソーシャリー）に援助すること」[39]であった。

活動目標の第1に掲げた C.L.C. の寄金集めに関しては，ロンドンの多くの労働組合支部を廻り，組織化も行なった。その効果もあって，全国仕立，裁縫および関連業労働組合 National Society of Tailoress, Dressmakers and Kindred Trades は，C.L.C. のために組合員1人ずつ年間2ペンス寄付することを，83対9で可決した。これは女性連盟委員のひとりチェシャイアが書記をしている

注 (34) *Minutes of Board Meeting, op cit.*, November 6, 1912.

(35) *Ibid.*

(36) *Meeting of Staff Committee, op. cit.*, December 18, 1912.

(37) *Ibid.*

(38) 'Women's League, C.L.C., Reports', in *Plebs Magazine*, vol. V, no. 5, June 1913, pp. 110-11.

(39) *Daily Herald*, May 23, 1913. この投書は，D. B. モンテフィオーレが，5月27日付シャーロット・コーデイ Charlotte Corday の投書に反論したもので，カットされて掲載された。投書の全文は，*Plebs Magazine* vol. V, no. 6, July 1913, pp. 134-35. に掲載されている。以下はカットされた部分の一部。「C.L.C. はすでに最良の革命的労働組合の支持をえており，（女性）連盟として，我々は我々自身の活動が知られるようになるに伴い，全ての階級意識のある戦闘的プロレタリア組織によって支持されることを確信する。……」（*ibid.*, p. 135).

組合で，かの女の説得活動によるところが大きかった。『プレブス・マガジン』は，少数の組合であるが，「その結果は重要である。……仕立工は男性の大組合に対しすばらしい例を示した。鉄道従業員たちはいつそれに続くのであろうか？」と書いて，チェシャイアの活動を絶賛している。(40)

女性連盟の活動目標の第2は，「ソーシャル」の準備をしたことである。1913年5月には，C.L.C.でロンドン社会主義者オーケストラ London Socialist Orchestra を招いてソーシャルの夕べを開催し，また，ホラビン夫人自らも加わる演劇も演じられている。(41) つづく1913年夏からの1年間には，3つのダンスパーティー，4つの演劇上演を行なっている。演劇はバーナード・ショウのものなどで，N.U.R. ロンドン支部に招かれて上演したこともあった。そのさいには C.L.C. のスタッフが C.L.C. の教育目的を聴衆に説明し，財政的援助を訴えている。(42) その時点は N.U.R. の年次大会が開かれる直前の1914年6月7日のことであり，C.L.C. 支援の主要な労働組合 N.U.R. が，S.W.M.F. とともに C.L.C. を所有しコントロールするか否かの重要な決定を迫られていた時点であったことを考慮すると，「ソーシャル」も一段と重要性を帯びていたのである。このような女性連盟による「ソーシャル」の催しは，「労働者文化」の活動として極めて重要な意義をもつものであり，今後より深く検討されるべき課題であろう。

1914年になると女性連盟は，さらに2人の女性労働組合員を C.L.C. に派遣することに成功した。£60を連盟が支払うという合意の上で，1914年2月から2人の女性学生が（寄宿制学生ではなく）通学した。1人はオールダムの A. スミス Alice Smith であり，他はベリーの M. ハワース Mary Howarth で，ともにランカシャー織布工組合 Lancashire Textile Operative's Union の組合員である。(43) ホラビン夫人は，こういう。「この事実の重要性は過大評価されるべきではない。近い将来もっともっと多くの女性が同じような機会をもたねばならない，ということが重要である。今日労働組合にとって疑いなく危険なことの一つは，教育を受けていない未組織の女性労働者のことである。ストライキ破りや労賃切り下げという点で資本主義の最大の資産でありうる女性は，男性の仲間と同じ階級意識の方針の下で教育されなければならない。(44)」

こうして，女性労働コレッジ設立には程遠いものの，C.L.C. に女性労働者を通学させた女性連盟は，鉄道女性ギルド Railway Women's Guild との接触を望み，それは1915年初めにブリスト

注 (40) 'Women's League, C.L.C., Reports', in *Plebs Magazine*, vol. V, no. 6, July 1913, p. 133.

(41) *Ibid.*, p. 133.

(42) 'Women's League Report', in C.L.C., *Fifth Annual General Meeting*, August 3, 1914, in *Plebs Magazine*, vol. VI, no. 8, September 1914, p. 176. 因みに，演劇はつぎのようなものだった。1913年8月4日，（年次大会の夕），*Riders to the Sea*, by J. M. Synge; *The Workhouge Ward*, by Lady Gregory; 1913年11月29日，*The Rising of the Moon*, by Lady Gregory; *How He Lied to Her Husband*, by Bernard Shaw; 1914年5月17日，*The Showing-up of Blanco Posnet*, by Bernard Shaw; 1914年6月7日，（N.U.R. ロンドン支部への特別招待），*Riders to the Sea*, by J. M. Synge; *The Showing-up of Blanco Posnet*, by Bernard Shaw.

(43) *Ibid.*, p. 176.

(44) *Ibid.*

ルで実現した。[45] 第1次世界大戦中の女性連盟の活動状況は明らかでない。

V 全国労働者コレッジ評議会（N.C.L.C）とレイバー・コレッジ

C.L.C. の学生数は1914年初めには14名であり，その内6名は S.W.M.F. が，2名は N.U.R. が奨学生として送りこんだ学生であった。他に2名の女性が，通学学生として前述の女性連盟から送られていた。C.L.C. はロンドン移転以来 £2,300 の銀行負債を抱えており，[46] それを一掃するために，1914年初め C.L.C. の財産を N.U.R. と S.W.M.F. の所有とするべく両組合に申し入れた。[47] 同年6月の N.U.R. の大会で，C.L.C. への派遣学生を2名から6名へと増加すること，および，奨学金を £1,150追加することを決めるが，その背景には，S.W.M.F. も同一額をだすことを条件に，両組合が共同で C.L.C. の財産所有権者になることが意図されていた。[48] 1カ月後カーディフで開かれた S.W.M.F. の特別大会は，N.U.R. の提案を支持する決定をした。[49] S.W.M.F. とは対照的に，N.U.R. の内部には J.A. トマス J.A. Thomas のように C.L.C. に敵対していたものもいた（かれは C.L.C. に奨学生を送ることにも反対していた）ので，その後の両組合間の交渉は多少難行したが，1915年夏までには両組合が C.L.C. を所有することになり，ここに初めて C.L.C. 財政は多少とも安定することになった。[50]

しかし第1次世界大戦中は，C.L.C. はスタッフの病気や出兵のため危機状態になり，1917年一時閉鎖に追いこまれた。G. シムズはイタリア戦線に参加し，1919年夏まで戻れなかったし，[51] D. ハードは病気のため戦後も戻れず，1920年7月13日に死去した。コレッジ長はクレイクが継いだ。1919年10月に C.L.C. は29名の寄宿制学生をもって再開し，名称も「レイバー・コレッジ・ロンドン」Labour Collge, London（以下では，旧名通り C.L.C. と略す）に変更された。[52]

戦後，各地の学習会とロンドンや地方の労働者コレッジの連合結成の必要性が強まり，J.F. ホラ

注 (45) *Plebs, Magazine* vol. VII, no. 2, March 1915, pp. 44-5.

(46) C.L.C. の銀行負債は，1914年7月1日現在，£2,319 15s. 5d. であった。なお他の収入の合計は £904 18s. 1d. で，両者の合計が収入 £3,253 17s. 7d. であった。C.L.C., *Balance Sheet, Financial Statement and Subscription List, July 1, 1914—June 30, 1915.* (MSS. 127/LC/3/1/8).

(47) *Plebs Magazine,* vol. VI, no. 2, March 1914, p. 135.

(48) *Ibid.,* p. 136.

(49) *Plebs Magazine,* vol. VII, no. 2, March 1915, pp. 25-6.

(50) W.W. Craik, *Central Labour College, op. cit.,* pp. 106-7.
1914年12月には，銀行より C.L.C. の財産を競売に付すると通告され，C.L.C. のハードは N.U.R. 宛に，購入を決定した2つの組合に早く所有権を購入するよう督促している。ハードは「強制売却というような不幸を我々は避けることを望む」と書いている（A Letter from D. Hird to the Executive of the N.U.R., December 7, 1914. 3葉の手稿，MSS. 127/LC/3/1/8)。

(51) C.L.C. 教員会議録には，1914年11月18日，G. シムズから軍隊に加わったので，コレッジの書記を辞任したい旨手紙が届いたこと，および「公式にかれの辞任を承認した」ことが記録されている（*Meeting of Staff Committee, op. cit.,* November 18, 1914)。

(52) W.W. Craik, *op. cit.,* p. 114.

ビンなどが中心となり，組織づくりが開始された。大戦中にはスコットランド労働者コレッジが設立されていたし，また，プレブス・リーグが各地に学習会を組織し，活発な活動を行なっていたのである。[53] 全国労働者コレッジ評議会 National Council of Labour Colleges—N.C.L.C. の設立のための最初の大会は，1921年10月8—9日，バーミンガムのクラリオン・クラブ・ハウスで開かれ，C.L.C. はもとより，スコットランド労働コレッジ，地方の労働コレッジ，プレブス・リーグの代表が参加した。会議の議長は，1911—12年に C.L.C. の学生であったプレブス・リーグのメンバーでダラム炭鉱夫組合の活動家でもあるウィル・ロウサー Will Lawther。名称も全国労働者コレッジ評議会 N.C.L.C. と正式に決定され，『プレブス・マガジン』をその機関誌にすることも決定され，G. シムズは暫定委員会の書記に任命された（委員会議長は J. ハミルトン Jack Hamilton）。[54] J.F. ホラビンは，N.C.L.C. 創設の意義をつぎのように書いている。「N.C.L.C. の財政は，完全に直接的に労働者組織からきている。全国的労働組合からの年々の奨学金という形か，あるいは，労働組合支部，労働評議会，労働・社会主義政党，協同組合の加盟費か寄付金の形のいずれかによるのである。したがって，労働者階級によるコントロールは完全である。しかし評議会（N.C.L.C.）は労働者によるコントロールを目ざすだけではない。それはプレブス・リーグと C.L.C. の創設者たちを鼓舞したのと同じ教育原理と政策を目ざしている。その原理と政策は，1世紀前，トマス・ホジスキンを鼓舞したものであり，階級としての『労働者の利益になる労働者の教育』を目ざしているのである。[55]」

N.C.L.C. 設立後ただちに，地方コレッジは工業都市や炭鉱地帯に主として設立されているという事情の下で，全国の労働組合へは充分な教育サーヴィスができないことが判明した。そこで C.L.C. は通信による教育提供を開始し，参考文献リストを載せた4頁の小冊子と論文課題を載せたものから成る通信課程を設置した。やがてエディンバラの J.P.M. ミラー J.P.M. Millar の家をその拠点として，[56] 急速に拡大していった。

翌1922年3月マンチェスターで開かれた N.C.L.C. の第1回年次総会では，N.C.L.C. の構成員資格が確定され，「全ての労働コレッジ，地方的および全国的教育組織，あるいは，独立労働者階級教育の原則を受け入れる全国組織から構成される。教育組織が別々の学習会と支部は，地方グループが形成されるまでは年間5シリングの参加費で加盟することができるが，全国評議会の選挙権はもたない[57]」とされた。かくして，プレブス・リーグが加入したのは勿論のこと，1922年には建築業労働者合同組合 Amalgamated Union of Building Trades Workers—AUBTW の組合員

注（53）第1次世界大戦中のプレブス・リーグによる学習会活動と地方レイバー・コレッジの設立については，B. Simon, *Education and the Labour Movement, 1870-1918, op. cit.*, pp. 332-39, 成田克矢前掲訳『イギリス教育史II，1870年-1920年』，pp. 375-84. を参照のこと。

（54）J.P.M. Millar, *The Labour College Movement, op. cit.*, pp. 31-3.

（55）J.F. & Winifred Horrabin, *Working-Class Education*, 1924, p. 51.

（56）J.P.M. Millar, *op. cit.*, pp. 53-4.

（57）N.C.L.C., *Report of N.C.L.C. Annual Meeting held on March 4 & 5, 1922.*（タイプ刷）(MSS. 127/LC/8/1/1/2) J.P.M. Millar, *op. cit.*, p. 34. にも転載されている。

65,000名が，1923年には，全国流通関連労働者組合 National Union of Distributive and Allied Workers（のちの USDAW）の組合員 86,000名が加わり，さらに同年，合同機械工組合 Amalgamated Engineering Union—A.E.U. 等3組合が加入した。かくして，1923—24年には，全国組合だけで5つの労働組合が N.C.L.C. の教育計画に加わったのである。

この N.C.L.C. の大規模な発展は，1925年には97団体の加盟（内訳は労働組合17，労働党14支部，労働組合評議会11，独立労働党4支部，協同組合5，別に N.U.R. 17支部等）となり，参加団体は加盟費年間 £1 1s. 支払うと2名の会員を無料で学習会（クラス）に参加させることができた。[58] 因みに N.C.L.C. に加わった労働組合数は，1923年の9組合，24年の22組合，25年の28組合，26年の27組合，27年の29組合，28年（9月）の32組合と推移している。また，N.C.L.C. の通信課程の学生数は，1923—24年の90名，1924—25年の645名，1925—26年の1,459名，1926—27年の2,702名（13カ月分），1927—28年の2,385名と，推移している。さらに学習会は，つぎのような推移を示した。[59]

年　度	学習会	学生数
1922—23	529	11,993
23—24	698	16,909
24—25	1,048	25,071
25—26	1,234	30,398
26—27	1,021	31,635
27—28	1,102	27,147

このような N.C.L.C. の活動は，C.L.C. にとっては二面的作用を及ぼした。一面では，狭くロンドンに限られず全国の労働者コレッジ運動と連携し，W.E.A. に対してもより強力に対峙することができた。N.C.L.C. と W.E.A. の対立，すなわちホラビンのいう拡張講座主義者（Extensionists）と独立主義者（Independents）の間の対立の原型はすでに1909年のラスキン・コレッジ R.C. の紛争にあったが，1923年頃にはとりわけ激しくなった。第1次世界大戦直後，W.E.A. のテューター G.D.H. コール G.D.H. Cole と W. メラー William Mellor（のちの『デイリー・ヘラルド』編集長）は，N.C.L.C. との協同を求め，W.W. クレイクと G. シムズに会いに出向いたこともあったが，N.C.L.C. 側の反応は冷たかった。公的財政援助を受け，それ故教育委員会等からのコントロールを受けていた W.E.A. は，独立労働者階級教育とは縁のない敵対的なものとする疑念を C.L.C. は持ちつづけており，コールの訪問は，W.E.A. に労働組合獲得の隠された意図があると思われたからである。[60]

しかし他面では，寄宿制大学の C.L.C. が少数の学生を抱えることに対し，地方各地の学習会で多数の労働者を教育する方が効果的であり，真の労働者教育であるという見解が，N.C.L.C. の中では強かった。もともと寄宿制大学と学習会とを同じ組織の構成員にしたところに出発点から無理

注（58）*N.C.L.C., Annual Report, 1925,*（MSS. 127/LC/3/1/3/1）pp. 1-4.
（59）*Education For Emancipation: The Work of N.C.L.C.,* 1927, pp. 2-3.
（60）J.P.M. Millar, *op. cit.,* pp. 57-8, p. 78.

があったことは否定できない。N.C.L.C. 創立大会のときすでに，シェフィールド労働コレッジ代表 E. ブラドショウ E. Bradshaw は，「地方組織にとっては，寄宿制の労働者コレッジは労働者階級運動のランク・アンド・ファイルから遊離しており，地方コレッジの（学習会）活動がまさに効果的である」[61]と発言していたし，その後も学習会を重視せよという主張は，N.C.L.C. の機関誌になった『プレブス』誌上に次々と掲載された。イタリア戦線から C.L.C. に戻った G. シムズも N.C.L.C. の活動に情熱を燃やすが，それは必然的に C.L.C. 内部での対立を深め，ついにかれは1924年 C.L.C. を去る。もっとも C.L.C. 理事会の議事録（1924年11月14日）には，「シムズ氏の不満足な行為（unsatisfactory conduct）により，去る 10月10日，書記はかれを停職にし，停職後シムズ氏はコレッジを辞めた，と書記が報告した」[62]とある。シムズ辞職の詳しい事情は判然としない。

T.U.C. 総評議会は，W.E.A.（全国組織として労働者教育労働組合委員会 Workers' Educational Trade Union Committee——W. E. T. U. C. を設置していた）と N.C.L.C. と C.L.C. を調整し，T.U.C. のコントロール下におく実行計画を策定した。1924年になると T.U.C. 総評議会は，従来の合同教育委員会 Joint Education Committee を解散し，新たに教育諮問委員会 Educational Advisory Committee を創設したが，これは総評議会の代表，協同組合，W.E.A., N.C.L.C. から各2名ずつの代表，R.C. と C.L.C. から各1名ずつの代表から構成された。そして，1925年9月の T.U.C. スカーバラ大会で，極めて重要な計画が決定される。この計画は，C.L.C. と R.C. は，総評議会の全国教育委員会 National Education Committee が直接運営し，その代表に N.C.L.C. がなるというものである。W.E.A. と N.C.L.C. はそれぞれ独自性を持ちながら，合同委員会をもつということも含まれていた。この T.U.C. の計画の目的は，「労働組合や労働者協同組合活動のために，労働者の能力を発展させ授けるために，労働者階級教育を提供すること」にあったが，これは N.C.L.C. と C.L.C. が新しい機関の教育はマルクス主義にもとづくものであり続けるべきであると主張したことを，T.U.C. で総評議会が受けいれたことを意味する[63]。W.E.A. は，ただちに中立性が破られる「危険な可能性」があるとして，教育委員会から圧力をかけられた。教育大臣で保守党員 E. パーシイ Eustace Percy は，「教育の真の敵は N.C.L.C. の一般書記のような人々である」と書き，少し後に，N.C.L.C. を「有毒な教育」をするとして非難した。W.E.A. はついにスカーバラ大会の決定から逸脱し，教員を労働組合員から任命しないことなどを決定した[64]。結局 T.U.C. のコントロール下に全ての労働者教育機関をという計画は失敗に終ったのである。

さらに1926年には，イーストン・ロッジ計画 Easton Lodge Scheme が提案され，結果的には，

注 (61) *Ibid.*, p. 29.

(62) *Minutes of Board Meeting, op. cit.*, November 14, 1924. J. P. M. ミラーは，「シムズがロンドンのイースト・エンドに消えた」のは，クレイクとフットの解雇（後述）と同様に競馬のギャンブルにコレッジの資金を流用したからと推測している（J. P. M. Milar, *op. cit.*, p. 44)。都築忠七「前掲論文」，p. 13参照。

(63) B. Simon, *op. cit.*, pp. 339-40, 前掲訳，pp. 384-85.

(64) 'The British Trades Union Congress and Workers' Education', in *Education For Emancipation, op. cit.*, p. 10.

労働コレッジ運動は混乱した。この計画は，ウォーリック伯爵夫人が自らのイーストン・ロッジにある邸と土地を寄宿制コレッジとして使用させることを T.U.C. に申し出たことに端を発する。かの女は1895年に社会民主連盟 S.D.F. に加入し，以来社会主義運動の強力な支持者だった。T.U.C 教育委員会は R.C. と C.L.C. の代表と共にイーストン・ロッジを訪れ，T.U.C. 総評議会はその申し出を受けることを決定した。G.D.H. コールがそこの初代コレッジ長になるはずだった。総評議会はイーストン・ロッジを整備するのに必要な£5万を3年間で組合員1人当り1ペンスの負担金をかけることによって得ることの承認を T.U.C. に求めた。このような多額な費用をかけて寄宿制コレッジをつくることに対しては，そこで教育できる学生は少数に限られるとの理由で，N.C.L.C. から反対が起った。「より重要な学習会に対して援助するという規定が全く含まれていない」というのが，かれらの反対した理由であるが，前述した N.C.L.C. の方針からもその理由はある程度納得できよう。ところが，C.L.C. もその計画に熱心でなかった。その理由は，労働者コレッジは農村地帯ではなく，労働運動や政治運動と学生が常時接触できる工業都市におかれるべきであるからというものだった。かくして，1926年の T.U.C. ボンマス大会では，244万1千対148万1千でイーストン・ロッジ計画は否決されたのである。(65) 1926年5月のゼネ・ストの敗北で，各労働組合は財政的に大きな打撃をうけ，労働者コレッジ支援も困難になってきていたという事情も，否決の背景にあった。そうした労働組合の財政状況は，間もなく C.L.C. を閉鎖へと追いこむことになるが，そのことに触れる前に，一つの事件を追うことにしよう。

VI レイバー・コレッジの衰退

1. コレッジ長クレイクと書記フットの横領事件

W.W. クレイクは1920年7月 D. ハードの後を継いで C.L.C. コレッジ長の職にあったが，1925年1月，解雇された。解雇理由は，学生の奨学金授業料の横領である。もちろんこの不名誉な解任は，クレイクの前掲書 *The Central Labour College* では一言も触れられていない。しかし，J.P.M. ミラーの前掲書 *The Labour College Movement* の中では，つぎのように書かれている。「クレイクは1922年と25年の間にレイバー・コレッジの資金が紛失したことに言及していないことを非難されることはないだろう。しかし，そのエピソードは，疑いもなく N.U.R. の1・2名の指導者の入手するところとなって，継続的に何らかの悪影響を与えた。クレイクがかれの本を準備しているときには，N.U.R. のボウコックを攻撃したコミュニスト・グループの活動を知らなかったことは明らかである。コレッジの最後の低落の相互に関連する諸原因は，ゼネストにより大きく悪化した N.U.R. と S.W.M.F. の継続する相対的貧困，かれらの財政負担を分かちあうよう他の組合を説得する努力の失敗，そして，コレッジを存続させるべく N.C.L.C. と協力することの

注 (65) イーストン・ロッジ計画については，*ibid.*, pp. 10-11. J.P.M. Millar, *op. cit.*, pp. 73-6.; W.W. Craik, *op. cit.*, pp. 140-44.

失敗，である。[66]」クレイクが，C.L.C. が最終的に閉鎖に追い込まれた原因は，イーストン・ロッジ計画 Easton Lodge Scheme を N.C.L.C. が棄却したことにあるとして，C.L.C. の外部にその原因を求めるのに対し，ミラーは，それは「誇張されているようにみえる」と批判的であり，1950年のミラー宛のラザフォードの書簡から，「1929年のレイバー・コレッジの閉鎖の原因は財政であるが，貴殿が触れた内部の紛争により助長されたと私は考える（当然，これは公式には一要因としては指摘されなかったけれど）[67]」を引用し，C.L.C. の内部紛争も要因の一つとしている。私は，クレッグと書記フットの授業料横領が，C.L.C. 支援の労働組合等の不信を買い，C.L.C. 閉鎖に連なる原因の一つになったと推測している。

コレッジ長クレイクが「コレッジの財政に関する違法行為により停職にされた」のは，1925年1月である。1925年1月8日の C.L.C. 理事会の議事録は，つぎのように記録している。理事会の出席者は，アブレット Ablett，ブラック Black，ゴア Gore，ジェンキンス Jenkins，ルーカス Lucas，フット Foot の6氏である。報告は書記フットが行なった。「書記は理事会に以下のことを報告する。前回の決定に従って，書記はさらに調査をすすめ，いまや £185 ずつの小切手が2回室内装飾業者全国組合の分と，£250 が1回ノーザムバーランド炭鉱組合の分が，クレイク氏の個人口座に払い込まれたことを報告しなければならない。クレイク氏は説明を求められたとき，その金を受けとったことを認めた。」理事会は検討の結果，クレイクの停職処分を決める。「全状況を検討した結果，我々は，クレイク氏をコレッジの，あるいはコレッジに関連するあらゆる仕事から停職させる決定をしたこと，さらに，全事実を2つの関連労働組合に報告し，つぎの指示を仰ぐことに

第1表　横領きれた授業料一覧表

年　月	授業料支払者	金　額
1920年8月	S.W.M.F. アバデーア地区	£150
1921年12月	ノッティンガムシャー炭鉱夫組合	£125
1922年3月	同　上	£250
1922年10月	S.W.M.F. モンマス，ウェスタン，ヴァリー地区	£100
1923年12月	同　上	£100*
1923年——	室内装飾者組合	£125*
1923年——	ノーザムバーランド炭鉱夫組合	£250*
1924年——	漂白染色者組合	£125*
1924年——	室内装飾者組合	£185*
1924年5月	ブロッカ氏（私費学生）	£30*
1924年10月	同　上	£5
1924年——	デニス氏（私費学生）	£30
	同上，本代	—£5　18s.
	合　計	£1469　2s.

* はクレイク氏が受領したが自分自身で使ったと認めたもの。

出典）*Minutes of Board Meeting, C. L. C.*, February 23, 1925.（MSS. 127/LC/1/1/1）

注（66）J.P.M. Millar, *op. cit.*, p.102.

（67）A Letter from Rutherford to Millar, May 6, 1950, quoted in *ibid.*, p.102.

（68）*Minutes of Board Meeting, op. cit.*, January 8, 1925.

賛成する。[68]」

さらに同年2月23日の理事会では，調査の結果判明した「支払われたが，コレッジの会計には記録のない授業料の一覧表」が提出された（第1表）。

使いこみが新たに判明して，2月23日の理事会はクレイクの解雇を決定した。[69] C.L.C. はその後，クレイクの横領に対して法的措置をとるため，日頃から法律問題が生じたさいには依頼していたパティスン・アンド・ブルーア Pattison & Brewer 法律事務所の指示を求めた。同年4月21日，当法律事務所は，「この件に関するフット氏宛の特別書簡で，我々の見解では告訴は正当で，それは成功するだろうと書いた。[70]」4月24日の C.L.C. 理事会は，弁護士のかような報告を受けて，更に弁護士と相談しながら法的訴訟を進行させるよう書記フットに指示する決定をした。[71] 6月18日には，検事の意見を聴いているところだとするパティスン・アンド・ブルーアからの書簡が読まれ，「書記はより迅速かつ明確な行動をとるよう指示する」決定がなされた。[72]（これ以降，理事会議事録では，クレイク使いこみの件の記載が途切れるが，弁護士事務所の本件への支払金帳簿によると，）7月に入ると，弁護士による警察法廷への手続きが具体化する。すなわち，7月7日には，「ウェスト・ロンドン警察法廷に出向くが，検事の申請によりクレイクの逮捕状が認められた[73]」のである。

ところが，奇妙なことに，クレイクは逮捕されない。フットのあと書記になったポウコックが，1926年10月に法廷で供述したところによると，「逮捕状が申請され，認められた。しかし，クレイクは逮捕を逃れた。そして私の知る限り，現在に至るまで逮捕は執行されていない[74]」のである。逮捕を逃れることのできた理由は必ずしも充分明らかではないが，クレイクは一時期大陸に逃れている。

事態をさらに複雑にしたのは，クレイクを告訴した C.L.C. の書記フットが，クレイクの共犯であったという事実である。この事実を隠しつづけるために，フットがクレイクの逮捕と裁判を望まなかったことも，大いにありうるだろう。フットも授業料横領をしていたという事実は，1926年になると，露呈されはじめる。1月8日，C.L.C. 理事選挙が行なわれ，旧理事の何人かは退任した。そのなかにフットもいた。3月13日の理事会では，書記に Th. ポウコック Thomas Pocock が選出され，コレッジの教育関係書記となった。（これとは別に事務関係書記も任命されることになった。）3月下旬に，会計の引き継ぎのため会計監査をするべくポウコックはフットと連絡をとるが，再三再四多忙を理由に，会うことを拒否される。4月に入っても会計監査は延び延びになる。ポウコック

注 (69) *Ibid.*, February 23, 1925.

(70) *To the Trustee and the Governors of the Labour College, Pattison & Brewer, REX v. CRAIK,* (MSS. 127/LC/7/3/10/1) p. 1. これはパティスン・アンド・ブルーア法律事務所が，クレイク訴訟費用を C.L.C. に求めた請求書であるが，法律事務所の行動が月日とともに簡潔に記されている。

(71) *Minutes of Board Meeting, op. cit.*, April 24, 1925.

(72) *Ibid.*, June 18, 1925.

(73) *To the Trustee and the Governors of the Labour College, op. cit.*, p. 3.

(74) *'Mr. Thomas Pocock Says'*, (10頁のタイプ刷) (MSS. 127/LC/7/3/1/145) これはフット裁判のさい（1926年10月21日），ポウコックが C.L.C. 書記として証言した速記録である。

は，こう証言する。「私はコレッジに1926年4月12日に行ったが，会計監査はまだ用意されていないことに気がついた。それ故私はフットと4月15日に来る手はずを整えた。私は4月15日にコレッジへ行くと，監査が行われているのに気がついた。監査が終るや否や，フットは立ち去った。私はそれ故，翌日再び帳簿を受けとるために行ったが，それは用意されていなかった。私は『日曜日』と書かれた手紙を受けとったが，それは1926年4月18日のことである。4月19日，私はコレッジへ行ったが，フットは鉄道会社で働くよう求められていたので，そこにはいなかった。それ故，私は書類をとりあげ，私自身でそれを見はじめた。この途中で，書籍に関するある会計が当然コレッジに支払うべきものであることに気がついた。私はフットにこのことの説明を求める手紙を書いた。……私はまた会計の中で，供給されたタバコとシガレットに関して支出があるのに気がついた。……私はフットに1926年5月24日付手紙で，書籍の会計とタバコとシガレットの会計について説明を求める手紙を書いた。[75]」これが横領事件発覚の発端であった。

1926年4月23日には，S.W.M.F. より，1925年度 C.L.C. 会計のうち「非常勤講師と他のサーヴィス」支出 £662 に疑義がだされた。[76] 調べた結果，書記フットが正規に取得すべき £300 以外に £147 も多く得ていることが後日判明する。[77]

1926年5月ゼネストが始まっていた。

1926年6月11日の C.L.C. 理事会では，書記ポウコックは（公式記録には），「フット氏がコレッジを4月17日に離れたと報告した[78]」が，（証言によると）「それまでの私の知るかぎりの事態の報告を理事会に提出し，さらに調査するよう指示された。[79]」ポウコックは，フットを何度も呼びだそうとしてうまくいかなかったが，ついに「6月23日，フットはコレッジに理事の一人エイクハースト氏を伴って来た。[80]」

フットに対する追求が始まった。

我々はフット氏に，モンマス・ウェスタン・ヴァリー地区からの £100 の小切手に関して説明を求めた。

フットは，かれが £100 の小切手を受けとったといった。

かれはまた，かれがその小切手をかれ自身の銀行に払いこみ，その金は学生たちの奨学金であると思い，現金をクレイクに与えた，といった。

私はいったのだが，小切手に書かれている町の名前とその振出人から，フットはその小切手

注（75） *Ibid.*

（76） A Letter from Evan Thomas (Assistant Secretary of S.W.M.F.) to T. Pocock, April 23, 1926. (MSS. 127/LC/7/3/1/1)

（77） *Labour College Accounts, 1925.*（1頁のタイプ刷）(MSS. 127/7/3/1/139); *The Labour College, Receipts and Payments Account, Year Ending December 31, 1925, Private and Confidential,* April 26, 1926, by T. Pocock.（1頁のタイプ刷）

（78） *Minutes of Board Meeting, op. cit.,* June 11, 1926.

（79） 'Mr. Thomas Pocock Says', *op. cit.*

（80） *Ibid.*

がどこから何の目的できたのか，判るはずだ。

フットは，帳簿の記入について説明が求められた。

それから，かれはいった。かれはその金額をコレッジの収入簿に入れ，また公式受領証に書きいれたが，クレイクがその金を使ったことにかれが気がついたとき，かれはその記入を削除し，受領証の控えに，「ロンドン地区自治体の家賃£10」と書きいれた。

かれはまた，炭鉱夫に送られた公式受領証は£100であるといった。

フットは，パーネル氏宛のかれの手紙の中で，かれがそれと判る前にその金の目的を知らせてくれるのを待っていると書いたことの説明を求められた。

フットは，「あれはカモフラージュだ」といった。(81)

その2日後の6月25日，C.L.C.は，特別理事会を開き，対策を練った。出席者は，議長のアブレット，S.W.M.F.からA.ジェンキンス，トマス・ルーカス，N.U.R.からL.エイクハースト，J.E.ゼンク，T.ポウコック（書記）であった。調査すべき点は3点あった。すなわち，1)コレッジの基金から購入されたタバコとシガレットについて，2)1924年12月に受けとった£100の奨学金について，3)コレッジの基金が購入した書籍代を学生たちが払っていた件について，であった。

審議の結果，1)のタバコ等々については，その年の3カ月間コレッジの基金から購入したことをフットは認め，その分の£16 3s. 5d.を返却することになった。2)の奨学金については，小切手を受けとり自分の個人口座に入れ，その後，クレイクに学生の奨学金と思って，現金を渡したことをフットは認めた。さらに£100を£10と改ざんしたことも認めた。3)の書籍代については，フットはコレッジに£6 16s. 6d.を負債しており，早急に返却することとなった。そして，理事会としては，1)以上のことを関連労働組合に報告すること，および，2)「我々の意見では，法的措置が，フット氏に対してとられるべきであることを，各々の労働組合に奨めること」の2点を決定した。(82)

このようなC.L.C.史上の汚点ともいうべきこの横領事件には，物的証拠があるのだろうか。ここに一枚の小切手がある。ウォーリック大学モダン・レコード・センター所蔵になるものであるが，日付は，1924年12月12日，オプトン・パーネル Opton Purnell と A.ウォルタース Albert Walters のサインがあり，フット宛に£100支払われた小切手である。ミッドランド銀行が発行した小切手であり，バークレイ銀行に振り込まれている。(83) また，バークレイ銀行の帳簿にも1924年12月18日にフットの個人口座に振り込まれたと記載されている(84)し，それを証明する次のような資料も残っている。

「バークレイ銀行株式会社

注 (81) *Ibid.*

(82) *Minutes of Board Meeting, op. cit.*, June 25, 1926.

(83) 小切手は，MSS. 127/LC/7/3/3/1, West London Police Court, Exhibit 9.

(84) Barklay Bank Ltd, Kensal Rise Branch. In Account with W. T. A. Foot Esq., December 18, 1924. に£100と記入されている（MSS. 127/LC/7/3/1/132), (West London Police Court, Exhibit 9)。

ケンソール・ライズ支店

83チェムバレン通り

1926年9月2日

1924年12月18日

顧客	貸方総額	銀行支店	振出人
フット W.J.A.	£100	ミッドランド，アボティラリィ，パーネル	£100

我々は上記が1924年12月18日の我々の取引日帳簿における記入の正確な写しであることを証明する。

バークレイ銀行株式会社

ケンソール・ライズ，

L.R. ゲイウッド　支店長[85]」

さらに，1926年12月12日付のパーネルからフット宛への書簡の写しも残っている。便箋は，南ウェールズ炭鉱夫組合 S.W.M.F. モンマス・ウェスタン・ヴァリー地区と印刷されており，「フット殿，上記地区からの学生レイ・ロバーツの1924年および1925年の授業料について。同封されている £100 の小切手は，レイバー・コレッジの上記学生の1924—25年次の授業料である。その旨の受領証を送付されたし。できるだけ早く銀行に小切手を渡されたし。敬具，オプトン・パーネル[86]」と書かれている。この書簡とともに £100 の小切手が送られたこと，そして，フットは個人口座にそれを振り込んだことは，明らかである。

1926年7月2日の C.L.C. 理事会の「回覧不可」と書かれた資料（おそらく当日理事に配布されたもの）は，「フット氏に関する未決済事項」と題され，「£100の学生授業料に関するオプトン・パーネル氏の書簡と受領証の写しは，フット氏がこの授業料に関し，完全に違法であるとする主張を論証した」とし，その他，タバコ等の不正購入等の証拠も蒐集中であるとしている[87]。この日の理事会は，2つの労働組合の回答に基づいて，フットに対する法的措置をとることを決定した[88]。

先の6月25日の理事会での法的措置をとるとの決定は，S.W.M.F. と N.U.R. の2つの組合も承認し，パティスン・アンド・ブルーアが再び弁護士として委任され，かれらは検事フラムプトンにも資料を提出した。7月22日，ウェスト・ロンドン警察法廷で召喚がなされ，3回の延期ののち，フットはロンドン裁判所で裁判を受けた[89]。再び3回延期ののち，途中10月11日に「3人の紳

注 (85) バークレイ銀行の証明書は，MSS. 127/LC/7/3/7/2, West London Police Court, Exhibit 9.

(86) A Letter from Opton Purnell to Foot, December 12, 1924. (MSS. 127/LC/7/3/1/147)

(87) *Board of Meeting, Labour College, July 2, 2 : 30 p.m., 1926, Not Circulated,* (1頁のタイプ刷) (MSS. 127/LC/1/1/1)

(88) *Minutes of Board Meeting, op. cit.,* July 2, 1926.

(89) *REX. v. FOOT, Diary of Events from March 24 to November 9, 1926.* (2頁のタイプ刷) (MSS. 127/LC/7/3/8/1); *Prosecution of Late Secretary Mr. W.T.A. Foot* (July 16, 1926) by T. Pocock. (1頁のタイプ刷) (MSS. 127/LC/1/1/1) 'not circulated' の鉛筆の書込みがある。

士」が告訴のとり下げを弁護士に打電するという「不当介入」もあったが[90]，裁判官はフットからの5時間にわたる聴取の末，全ての点で有罪であるとし，「フット氏が語った複雑な網の目のような嘘により，フット氏は，初犯であるけれども再犯と同じ6カ月の実刑という，かなり珍しい判決を受けねばならない，と裁判官は述べた[91]。」

かくして，C.L.C. コレッジ長クレイクの横領事件に書記フットが共犯であったことが明らかにされた。確かに，この事件は，「輝かしい労働者教育機関」であった C.L.C. 史上の汚点であった。前掲の小切手や銀行帳簿までもが残されているのはこの事件が裁判になり，ウェスト・ロンドン警察法廷が横領事件の証拠資料として蒐集したからである。もし事件として告訴されることがなかったならば，かような一次資料は残存しなかったであろう。

2. コレッジの閉鎖

1926年5月のゼネストは，炭鉱労働者だけが秋まで闘争を続けたが，M.F.G.B. だけでなく，労働組合は全般的に財政状況が逼迫し，その結果，C.L.C. への財政支援が困難になってきた。1925・26年にクレイクとフットの授業料横領が明るみにでて，C.L.C. に対する不信も加わり，C.L.C. 1929は年ついに閉鎖に追いこまれる。

支持組合のなかで，まず N.U.R. 執行委員会が，1926年12月，C.L.C. 支援の中止を決定した。この決定は書簡で12月17日の C.L.C. 理事会に伝えられたが，その内容は，「N.U.R. 執行委員会は現在の学生が課程を終了するという責任を果したのちは，コレッジの所有権とコントロールを継続しない[92]」というものであった。理事会は，「コレッジの将来が不安定である故」，コレッジ長 T. アシュクロフト T. Ashcroft 以下3名の教員の雇用を1927年7月末までと決定した[93]。もっとも，N.U.R. 執行委員会の決定は，N.U.R. 総書記クラムプ Cramp の C.L.C. 閉鎖賛成論にもかかわらず，1927年夏のカーライルでの N.U.R. 年次大会で否決されている。多くの支部が閉鎖に反対したのである。（しかし，大会は N.C.L.C. が C.L.C. を救済するという案も否定している[94]。）その結果，C.L.C. は多少延命した。

事態を憂慮した T.U.C. 総評議会は，すでに1927年2月10日，シトリン Citrine，ヒックス Hicks，ボウエン Bowen を C.L.C. に派遣し，コレッジの将来に関し，コレッジ長と書記と討議していたが[95]，その結果，T.U.C. 総評議会は2月25日，C.L.C. 宛につぎのような書簡を送った。

「臨時措置の一部として，またイーストン・ロッジ計画が採用されることを期待して，一般評議

注 (90) *Minutes of Board Meeting, op. cit.*, October 20, 1926.

(91) *The Labour College and Secretarial Duties,* (November 29, 1926) by T. Pocok. (3頁のタイプ刷) (MSS. 127/LC/3/2/3), p. 3.

(92) *Minutes of Board Meeting, op. cit.*, December 17, 1926.

(93) *Ibid.*

(94) F. Moxley, *Railwaymen and Working Class Education,* in Ph. S. Bagwell, *The Railwaymen, op. cit.*, p. 688.

(95) *Minutes of Board Meeting, op., cit.*, March 25, 1927.

会は，1926—27年度ラスキン・コレッジに対する奨学金の一部を援助することにした。一般評議会はかような責務を誇るべきこととするが，同時にラスキン・コレッジに提供されるのと同じ援助手段がレイバー・コレッジにも与えられるべきであると考える。[96]」そして，ラスキンに対すると同じ額，5名分の奨学金£375を送る用意がある旨，書かれていた。C.L.C. 理事会は，「感謝して，T.U.C. 総評議会の財政援助を承認した。」

1927年4月9日には，C.L.C. の将来を考えるために N.C.L.C. が主催する会議が開かれ，S.W.M.F. を含め数組合代表が参加した。会議は，C.L.C. に対し三者，すなわち2つの組合(S.W.M.F. と N.U.R.)，C.L.C. の理事会，N.C.L.C. が，「合同で寄宿制および学習会の調整計画を準備する可能性と，独立労働者階級教育に加わっている全組織の活動を共同で運営することを検討する会議を召集することを求めた。[97]」この決定に沿って，5月4日会議が開かれることになった。しかし，5月4日には，N.U.R. が欠席する旨伝えてきたので，当初代表を送ることを決めていた S.W.M.F. も N.U.R. 欠席を理由に決定を変更し，結局 N.C.L.C. だけが出席するという惨めな結果になった。C.L.C. の閉鎖という事態は避けられなくなってきた。この日の会合での決定は，三者が C.L.C. と同等の代表権を持ち，同時に同等の財政負担を行なうことを，N.U.R.，S.W.M.F.，N.C.L.C. の三者に求める，というものであった。N.C.L.C. 代表は，C.L.C. の財政の3分の1を負担することに同意した。[98] しかし，C.L.C. 側のアシュクロフトは，N.C.L.C. の援助は必要ないと考えていたようである。というのは，以前と同様にこの危機も乗り越えられると楽観視していたからである，とミラーは書いている。[99]

1928年の T.U.C. スウォンジー大会で，N.U.R. の J. トマス Jimmy Thomas と S.W.M.F. の W. メインウァリング Will Mainwaring は，1年余にわたってかれらの組合が C.L.C. 財政の中心になってきたが，今や他の労働組合にも財政負担をしてもらうべきだと訴えた。だがこの提案は否決された。[100]

1928年10月5日付で C.L.C. は書記とコレッジ長名で労働組合宛に書簡を出すが，それはつぎの文面で始まっている。

「　　レイバー・コレッジの将来

拝啓　ご承知の通り，レイバー・コレッジは，S.W.M.F. と N.U.R. により維持されコントロールされており，T.U.C. がコレッジを引き受け，組織された労働運動全体のために独立労働者階級教育を促進するためにそれを利用するよう T.U.C. を説得する試みがしばしばなされてきた。

注 (96) *Ibid.* この決定は，T.U.C. エディンバラ大会（1927年9月）で正式に承認された（J.P.M. Millar, *op. cit.*, p.96)。

(97) *Ibid.*, April 13, 1927.

(98) *Ibid.*, May 3-4, 1927.

(99) J.P.M. Millar, *op. cit.*, p.98. クレイクは，N.C.L.C. からの援助については一言も書いていない（*ibid.*, p.99)。

(100) *Ibid.*, pp.96-7.

今年のスウォンジーの（T. U. C.）大会で，事態は元に戻った。……

炭鉱業の悲観的状況のために，S. W. M. F. にとっては財政的責任は重すぎるものになりつつあり，かれらは，（C. L. C.）理事会に，他の労働組合にレイバー・コレッジを支持する用意があるか否か，もしあるならばどの程度にかを問い合わせるよう求めた。[101]」

このような問い合わせの書簡は46の労働組合と25の炭鉱組合支部に送られたが，17組合が返答をよこしただけだった。返答したものは，いずれも C. L. C. を援助することはできないという回答だった。[102] その状況が報告された1928年11月27日の C. L. C. 理事会は，N. U. R. と S. W. M. F. に対し，「いかなる組合からも，財政援助等を得られる展望はないようにみえる」と知らせることを決めた。

S. W. M. F. は1929年4月18日，カーディフでの大会で，正式に C. L. C. から手を引くことを決め，4月26日の C. L. C. 理事会で S. W. M. F. の総書記 Th. リチャーズ Thomas Richards が「S. W. M. F. のレイバー・コレッジに対する責任は，1929年7月以後，停止される[103]」と伝えた。この決定と「N. U. R. の1927年のカーライル年次大会での決定を考慮して，教員，書記，学内臨時職員全員に対し，1929年7月31日以降，かれらの職務は要請されない[104]」と決議された。

閉鎖が決定的となったなかで，1929年の総選挙活動のため，12日間コレッジは日常業務を停止した。総選挙の結果，数名の C. L. C. 卒業生が労働党議員に当選している[105]。また，5月17日には，日本人の S. ヨシサカ（神戸）が C. L. C. に学生としての入学申請をだし，私費学生としての入学を許可されている[106]（この日本人学生がじっさいに入学したか否かは不明）。

N. U. R. と S. W. M. F. は，C. L. C. の閉鎖を最終的に承認し，早急に C. L. C. の財産と家財を売却するよう求めた[107]。財産評価の試算の結果，ロンドンの2つの家屋は計£2,900，家財は£154であった。家屋は9月の第3週までに競売されるとされ，金額は「秘扱い」とされたが[108]，9月12日に£3,000で売れた[109]。翌9月13日，C. L. C. 最後の理事会が開催された。N. U. R. と S. W. M. F. は C. L. C. の教職員の失職に対し，財政的援助の申し出があり，教職員は6週間分の給与相当額を求めたが，教員と書記は1カ月分を，学内職員は2週間分を休暇ボーナスとして支給するという，6月20日の決定を変えなかった[110]。

財産処理のため1930年2月17日，C. L. C. 受託者会議が開かれ，S. W. M. F. から N. リース Noah Rees と Th. アンドリュウス Thomas Andrews が，N. U. R. から Ph. ヒュウレット Philip

---

注(101) *The Future of the Labour College,* October 5, 1928.（1頁のタイプ刷）(MSS. 127/LC/3/2/4)

(102) *The Future of the Labour College,* November 24, 1928.（2頁のタイプ刷）(MSS. 127/LC/3/2/4)

(103) *Minutes of Board Meeting, op. cit.,* April 26, 1929.

(104) *Ibid.*

(105) *Ibid.,* June 20, 1929.

(106) *Ibid.*

(107) *Ibid.,* June 28, 1929.

(108) *Ibid.,* July 11, 1929.

(109) *Meeting of the College Trustee,* September 12, 1929. 購入者は Y. de Vries という人物。

(110) *Minutes of Board Meeting, op. cit.,* September 13, 1929.

Hewlett と F.C. ファグ F.C. Fagg が，それに前書記 T. ポウコックが出席した。家財も £139 で10月3日に売れ，協同組合銀行に合計 £8,517 12s. 8d. が C.L.C. の預金としてあることが報告された。[111] N.U.R. と S.W.M.F. は，これをそれぞれの組合が二分することを求めた。しかし弁護士に照会の結果，二分することは法的に不可能と判り，結局協同組合銀行にそのまま入れておくことが決定された[112]（その後この £8,500余がどうなったかは不明）。

ここでC.L.C. 理事会議事録は終っている。それは，小規模ではあったが，A. ベヴァン Aneurin Bevan をはじめ，N. エドワード Ness Edward，J. グリフィス James Griffiths，J. ジョーンズ Jack Jones，W. オーエン Will Owen，W. コウルドリック Will Coldrick 等々数多くの労働党，労働組合等の指導者を輩出した，「輝ける」労働者教育組織 C.L.C. の閉幕であった。この「輝ける」という形容詞に，多くの留保条件がつくことは，本稿が示したところである。

付　C.L.C. のカリキュラムと派遣学生試験問題

〔A〕 1922年の C.L.C. のカリキュラム

1) 方法論（W.W. Craik——コレッジ長）
　a 認識論　b 史的唯物論
2) イングランドにおける社会主義の歴史（W.W. Craik）
　a トマス・モア　b ジョン・リルバーンとジェラルド・ウィンスタンレイ　c 18世紀以前の土地改革者　d 19世紀第1・四半期の英国社会主義
3) イングランドの産業史（A.M. Robertson）
4) 産業革命（W.W. Craik）
5) 労働組合の発生と発展（A.M. Robertson）
6) 経済学初級（A.M. Robertson）
7) 経済学上級（W.H. Mainwaring）
　a 近代資本主義　b 株式取引と商品取引　c 近代産業の競争　d 銀行史　e 銀行と信用機構　f 国際交易　g 貿易
8) 経済地理学（J.F. Horrabin）
　a 序論　b 一般地理学　c 史的地理学　d 今日の経済地理学上の諸問題
9) 帝国主義（W.H. Mainwaring）
10) 哲学史（W.W. Craik）
　a 古代　b 近代古典哲学
11) 労働組合法と労働災害法（W.H. Thompson, A.U.B.T.W. 等の弁護士）
　a 歴史と1871年法　b 刑事犯と訴訟可能な不法行為　c 71年法以後の法律　d 一般法，労働災害法，および雇主責任法　e 労働者災害保障法
12) 地方政府（Edward Gill）
13) 先史時代の技術進歩（W.W. Craik）
14) 家族史（W.W. Craik）
15) 古代奴隷制の没落（W.W. Craik）

注(111) *Minutes and Decisions of* a Meeting of *the Labour College Trustees*, February 17, 1930.
(112) *Ibid.*, February 21, 1930.

16) 文学 (J. F. Horrabin)

a 史的唯物論と創造的芸術　b 芸術と文学，および独立労働者階級教育におけるその位置づけ　c 文学と「時代精神」　d ブルジョアジーと文学　e 今日の文学傾向

17) ロンドン—国家の都市 (J. T. Walton Newbold)

18) 労働党の活動の諸側面 (W. W. Craik, W. H. Mainwaring, A. M. Robertson)

19) 協同組合運動 (A. M. Robertson)

補充講義

数学 F. J. James, 統計 H. Levy, 帝国主義 H. N. Brailsford, マルクス主義と人種問題 W. Paul, 心理学 E. Paul, 伝記と一般史 J. A. Fallows, 革命の進化 T. A. Jackson, 近代産業組織 T. A. Jacson, 公開演説 C. S. Bunn, エスペラント P. J. Cameron.

カリキュラムが網羅的にできているのは驚くほどであるが，同一人がいくつかの講義を兼任しており，その水準は，当時の学問研究の水準にも規定されていた。もとより講義内容を正確に把え評価することは不可能であるが，つぎに示すようなより詳しい講義内容と指示されている参考文献から，およその内容と水準は推測されよう。たとえば，W. W. クレイクの講義した 4)「産業革命」の内容は，1)革命以前（経済状態，階級関係，政治団体，正義，道徳，宗教），2) 技術変化—革新，3) 生産・所有関係に対する諸影響（階級，労働組合），4)産業革命の政治的諸結果，5)正義，科学，道徳，宗教。

参考文献としては，Beard, *The Industrial Revolution;* Gibbins, *The Industrial History of England;* Beer, *History of British Socialism;* Engels, *Canditions of Working Class in England;* Rogers, *Six Centuries of Work and Wages;* Webb, *History of Trade Unionism;* Hammond, *The Village Labourer, The Town Labourer;* Starr, *A Worker Looks at History;* Craik, *The Modern British Working-Class Movement.* が挙げられている。

もうひとつ，A. W. Robertson の講じた 5)「労働組合の発生と発展」を例にとってみてみよう。内容は，1)労働組合の基礎と起源，2)1825年～1835年の労働組合，3)チャーティスト運動，4)退歩の時期，5)新組合主義，6)19世紀末の労働組合，7)産業不安，8)産業別組合主義，9)戦争の諸影響，10)労働者組織の将来，であり，参考文献としては，Webb, *History of Trade Unionism;* Craik, *Short History of the Modern British Working-Class Movement;* Cole, *World of Labour and Organisation in Industry;* Mellor, *Direct Action;* Hovell, *Chartism;* Beer, *History of British Socialism* (Chap. on "Chartism") が挙げられている。

〔B〕 C. L. C. への派遣学生試験問題

2つの組合が自らの組合員に奨学金を通常2年間ずつだしていた。寄宿制学生は年間£125で，これは授業料と寄宿舎費であった。通学学生のばあいは£40であった。奨学生選出試験は，各労働組合が実施したが，論文と設問から成っており，前者は500語以下で，後者は各問題毎に50—100語であることが要求され，試験時間は合計2時間30分。試験問題には，以下にみるように，極めて実践的問題がだされた。

N. U. R. (全国鉄道従業員組合) 1921年6月実施

論文——三角同盟 Triple Alliance の機能はどうあるべきであると考えるか。また，これらの機能を効果的に遂行するためには，いかにそれは構成されるべきであるか。

設問——1)実施したならば鉄道従業員にただちに有益な効果をもたらすと思う，4つ以下の要求を含む案を書け。各々につき理由を簡単に述べよ。

2)同一の職階または部門から構成される支部と混合した職階から構成される支部という，2つの支部組織の方法のうち，組織全体の効果的統一のためには貴君はどちらが最もよく考案されていると考えるか。

3)スライディング・スケールの原則による賃金規制に賛成か反対か，理由を挙げて述べよ。

4)次の用語で貴君が理解するところを述べよ。a 国家，b 提案中の炭鉱夫の「プール制」，c クラフト・ユニオン。

S. W. M. F.（南ウェールズ炭鉱夫連盟）の最終試験　1921年9月実施（予備試験は略）

論文――三角同盟は復活すべきか。もしすべきでないならば，効果的統一の観点から，貴君は何がそれに代替すべきかを提案せよ。もし三角同盟が復活すべきと考えるならば，その再構成に当り，貴君は効果という観点からいかなる構造と政策の変更を主張するか。

設問――（設問は約 200 語）

1)M. F. G. B. の3分の2以上でストライキを決定するという規約に賛成または反対の理由を2つ書け。

2)1920年炭鉱業法の実施は，賃金と利潤の関係を規制する新しい制度という点で，炭鉱夫にいかなる利益または不利益をもたらすと貴君は予測するか。

ノッティンガム炭鉱夫連合1920年9月実施

設問――1)過去2年間で大英炭鉱夫連合 M. F. G. B. の側にとって最も重要な成果は何であったと貴君は考えるか。

2)補償法の炭鉱夫の観点からの欠点は何か。

3)現在の様々な炭鉱組織の連合制に代って，もし全国の炭鉱夫が単一の中央組織に合同されたならば，それは有利であるかそれとも不利であるか。

4)炭鉱業における「ミドルマン」の，炭鉱所有者とは異なる，利潤の源泉は何か。

5)炭鉱国有化は，いかにして炭鉱業以外の労働者の利益になりうるか。

6)次の用語の，貴君の理解するところを記せ。

「展開」"Evolution"，「革命」"Revolution"

出典）*The Labour College,* 1922.（MSS. 127/LC/4/3/4/1）

付記）前稿(上)および本稿作成のための資料利用のさいおせわになったウォーリック大学モダン・レコード・センターの R. Storey と A. Tough の両氏に，記して謝意を表したい。

（経済学部教授）